

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：47605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02580

研究課題名(和文) 北アイルランド出身の小説家ジョージ・A・バーミンガムの現代的意義

研究課題名(英文) Universal Significance of a Novelist from Northern Ireland, George A. Birmingham

研究代表者

八幡 雅彦 (Yahata, Masahiko)

別府大学短期大学部・その他部局等・教授

研究者番号：50166568

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：バーミンガムの小説は存命中は幅広く読まれていたが、今日では読まれることが少ない。その再評価を行った。バーミンガムのキリスト教聖職者としての本分が彼の小説にいかにも強い説得力を付与しているかを検証することにより、彼が訴える「絶望の中のユーモア」が人間が対立を解決するうえで、また人間が有意義な人生を送るうえでいかに必要不可欠なものであるかを実証した。具体的には第一次世界大戦を題材にした『蜘蛛の巣』(1915年)、『フランスの従軍司祭』(1918年)、『我らが犠牲者』(1919年)等の作品を通してである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、従来、批評家たちの間ではバーミンガムは深みのないユーモア小説家と捉えられがちだったが、本研究を通して、バーミンガムは戦争小説、ミステリー等幅広い作品を書いており、多種多様な彼の作品のうちには「絶望の中のユーモア」というべき深い意味を持つユーモアが見て取れることを実証したことである。社会的意義は、そのような絶望の中においてもユーモアを見出そうとする姿勢は人間が生きてゆくうえで重要な姿勢であることを示し、バーミンガムの作品の普遍的・現代的意義を明らかにしたことである。

研究成果の概要(英文)：Today Birmingham's novels are rarely read though they had a wide readership while the author was alive. My research gave a reappraisal to Birmingham's novels. It investigated how his vocation as a Christian clergyman gave strong convictions to his novels and revealed how indispensable Birmingham's faith in "humor in despair" is for humans to settle conflict with others and to lead a meaningful life. Specifically, books on the First World War such as "Gossamer" (1915), "A Padre in France" (1918) and "Our Casualty" (1919) were being discussed.

研究分野：アイルランド文学

キーワード：ジョージ・A・バーミンガム 北アイルランド小説 絶望の中のユーモア 正義と葛藤と愛 普遍性と現代的意義 キリスト教聖職者 ナショナリズム ユニオニズム

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

パーミンガムは生前幅広く読まれていたが、死後は忘れられた存在となった。しかしパーミンガムの価値を認識したダブリン大学トリニティ校の R.D.B. フレンチが 1950 年代にパーミンガムの子孫からパーミンガムの手紙、新聞・雑誌等の記事、小説原稿、家族写真等の寄贈を受け “Papers of J.O. Hannay” (以後「ハネイ文書」と称す)として編纂し後世の研究者たちに道を開いた。フレンチ自身はパーミンガムに関する研究書の出版を目指したが志半ばで他界した。その後、「ハネイ文書」を活用した研究が行われ、1959 年にはアン・オドネルが修士論文(クイーンズ大学ベルファスト校)の中でパーミンガムの小説はアイルランド、イギリス等の特定地域の描写でありながらも世界的な普遍性を持つと訴えた。1992 年にはアイリーン・ライリーが別の修士論文(アイルランド国立大学メイヌース校)の中でパーミンガムの小説のアイルランド史における重要性を論じた。1995 年にはブライアン・テイラーが *The Life and Writings of James Owen Hannay (George A. Birmingham)* の中でユーモア小説家パーミンガムとキリスト教聖職者ハネイは表裏一体をなしている指摘した。2010 年にはジェラルド・ディナーンが博士論文(ダブリン大学トリニティ校)の中でパーミンガムの作品はイエイツやジョイス同様読まれるべき価値があると主張した。他にもフィッツパトリック・ディーン(2004 年)がアイルランド演劇に関する研究書の中で、パーミンガムの *General John Regan*(1913)をシングやオケイシー等の名だたる演劇作品と同等に扱った。またジョン・ウィルソン・フォスター(2008 年)とテリー・フィリップス(2015 年)がパーミンガムの *Gossamer*(1915)を、第一次世界大戦を描いた重要なアイルランド文学作品のひとつとして論じるなど、近年、国外ではパーミンガムに対する再評価の兆しが見られていた。国内ではパーミンガムの研究を行っているのは応募者のみであるが、これまでの研究を通してアイルランド文学研究者の間では認識が高まりつつあった。

2. 研究の目的

パーミンガム(本名ジェイムズ・オウエン・ハネイ)は 60 の小説、2 つの演劇、30 のノンフィクションを残した。本研究の全体構想は、パーミンガムの作品を完読し彼の再評価を行うことであった。彼の小説の大半はユーモア小説であった。本研究の目的は、キリスト教聖職者としての本分がパーミンガムの小説にいかに関し説得力を付与したかを検証し、彼のユーモアの特徴をアイルランド人のユーモアの特徴との関連において論じ、彼が提唱する「絶望の中のユーモア」が人間同士の対立を解決するうえで、また人間が有意義な人生を送るうえでいかに重要不可欠な信念であるかを実証し、それによって今日では読まれることの少ないパーミンガムの小説の現代的意義を呈示することであった。

応募者がパーミンガムの研究を開始したのは 20 余年前で、北アイルランドのナショナリストとユニオニストの対立問題を考察するうえでのパーミンガムの小説の重要性を解明することを試みた。彼はナショナリストであったが、ユニオニストにも共鳴し双方の狭間で苦悩し、その苦悩を彼の初期の政治小説の中で表現した。後にパーミンガムは、人間同士の対立を避けるうえで必要なのは「仕事はまじめに考え過ぎるべきではない。仕事とは常にコミカルなもので、ジョークの気持ちを持ってやるべきだ」(自叙伝 *Pleasant Places*, 1937)という信念に至り、それを 6 作目の *Spanish Gold* (1908)以降の数多くのユーモア小説の中で表現した。パーミンガムのこの信念が説得力を持つのは、彼がアイルランド独立戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦という激動の時代を信仰心の深いキリスト教聖職者として生き、それゆえに人間同士の融和を心から願うようになったからであり、応募者は、パーミンガムの初期の政治小説と同様に、中期から後期にかけてのユーモア小説の普遍的意義を呈示し続けてきた。パーミンガムは 60 の小説、2 つの演劇、30 のノンフィクションを出版した多作な作家であり、応募者は今日も彼の作品を読み続けている。昨年から今年にかけて読んだ第一次大戦従軍記 *A Padre in France*(1918)、同じく第一次大戦を題材にした短篇小説集 *Our Casualty*(1919)を始めとする一連の作品からはパーミンガムの作品のさらなる深みを実感した。ヒルダ・マーティンデイルはパーミンガムの回想録(1951)の中で、「真の絶望を避ける唯一の望みは、物事のコミカルな側面を見ようとする断固たる決意です。人間は何度も失敗を繰り返すものです。そしてもし人間が失敗から笑いの種を見つけることができなければ落ち込むだけです」というパーミンガムの言葉を引用している。応募者はパーミンガムの作品を読み続けてゆく中で、彼の提唱するこの「絶望の中のユーモア」は人間が有意義な人生を送るうえで必要不可欠な信念であることをさらに強く認識するようになった。そこでパーミンガムの作品を完読し彼の全体像を把握したうえで研究を推進し、彼が提唱する絶望の中のユーモアの重要性を解明することによりこれまでの研究成果を発展させる意向であった。

3. 研究の方法

(平成 29 年度)

前述の *A Padre in France* と *Our Casualty* に関しては平成 28 年 12 月の日本アイルランド協会年次大会で口頭発表を行った。そしてそれを基に研究を推進し、平成 29 年度の同学会紀要(平成 30 年 3 月発行予定)に論文発表した。パーミンガムは、「臆病やずる賢い方法で戦争の時に兵役から逃れ家を離れない人間は卑怯者」(*Can I be a Christian?*, 1923)と述べ戦争を肯定している。そして 50 歳となり兵士

として戦うことが不可能となったパーミンガムは従軍司祭として志願しフランスで戦うイギリス軍に同行する。とはいえ *A Padre in France* における、兵士たちが死と隣り合わせで、軍事基地で余暇や趣味の時間を過ごす描写はかえって戦争の残酷さを伝え、戦争はしてはいけないということを読者に実感させる。*Our Casualty* も、戦う兵士たちの描写は一切ないが、様々なエピソードを通して兵士たちの人間性を描写し戦争の残酷さを呈示している。この2作の戦争文学としての価値を実証した。8月にはダブリン大学トリニティ校を訪れ、古文書研究図書館に所蔵されている「ハネイ文書」の調査研究に当たり、パーミンガムの書簡や新聞・雑誌記事の検証を通して聖職者としてのパーミンガムの活動を探った。ダブリン大学での調査研究の後にベルファストを訪れ、クイーンズ大学ベルファスト校講師で、現代北アイルランドを代表する小説家グレン・パタソン氏に会ってインタビューを行った。パタソン講師も、パーミンガム同様、ベルファストのプロテスタント・ユニオニストの家庭の出身だがカトリック・ナショナリストにも共鳴し、ユニオニズムとナショナリズムのボーダー超越を模索する作品を書き続けている。特にカトリックとプロテスタントの友人同士の若者たちが北アイルランド紛争に翻弄されながらも苦難を乗り越えてゆく *The Rest Just Follows*(2014) は、ナショナリズムとユニオニズムの正当性の狭間で苦しむ若者を描いたパーミンガムの初期小説を想起させる。パタソン講師の最新ノンフィクション *Here's Me Here: Further Reflections of a Relapsed Protestant* (2015) と最新小説 *Gull*(2016) に関する意見交換を行うことにより、パーミンガムの理解に役立った。10月には IASIL JAPAN 学会でパタソン講師のこのふたつの作品に関する研究発表を行った。(平成30年度)

パーミンガムを中心に北アイルランド小説の研究を行った。8月にはダブリン大学トリニティ校にて「ハネイ文書」の研究に当たった。パーミンガムがなぜアイルランドはイギリスから独立することを主張したのか。それは政治的理由というよりも、イギリス本国から税金を搾取されるのを忌避すべきだという経済的理由によるものであることが一部理解できた。また土地同盟の指導者マイケル・ダビットがパーミンガムの小説を称賛する手紙にも接し、パーミンガムの価値を再認識した。ダブリンを訪れた際、北アイルランドの小説家ニール・ヘガティに会い、話題を呼んだデビュー作 *Inch Levels* (2016) について論じ合った。彼と実際に話し合うことによって「家族」をテーマにした普遍的な訴えを持った作品であることが理解できた。10月には北アイルランドの女性小説家ディアドレ・マドゥンが IASIL Japan 学会に招かれ来日した。その際に、彼女の *Molly Fox's Birthday* (2008) と *Time Present, Time Past* (2013) を取り上げ、口頭研究発表を行い、マドゥン自身にも聴いてもらった。発表の内容は、この2作品が家族をテーマとし、どの家族も問題を抱えているが、家族は団結してそれらの問題を克服し生き延びてゆく義務があることを訴えている、そしてそれは勇気を与えてくれるメッセージだと結論付けた。この発表は、『別府大学短期大学部紀要』第38号(平成31年3月)において、彼女の他の2作品と併せて論じた。パーミンガムは、今日なおナショナリストとユニオニストの対立が続く北アイルランドの出身であるがゆえに強烈な「正義」「葛藤」「愛」の感情を持っており、それらはパタソン、マドゥン、ヘガティらの作家たちにも受け継がれていることを認識した。(平成31年度・令和元年度)

4月下旬から5月上旬にかけて Long Room Hub Fellow としてダブリン大学トリニティ校に招かれ、古文書図書館の「ハネイ文書」を中心に研究を行った。同時に、ダブリン大学英文科でアイルランド現代小説を中心に講じるイヴ・バットン博士に会い、北アイルランド小説について語り合うとともに、再びヘガティ、マドゥンに会って彼らの作品を中心に論じ合った。8月にも再びダブリン大学を訪れ、ハネイ文書の研究を行うと同時に、北アイルランドで初のブッカー賞作家となった Anna Burns の *Milkman* (2018) の舞台を訪れた。10月の IASIL JAPAN 大会ではこの小説について研究発表し、ゲストとして招かれていた北アイルランドの小説家オーエン・マクナミーにも聴いてもらうと同時に、発表後、彼と北アイルランド小説に関する話し合いの機会を持つことができた。翌年3月には、マドゥン、パタソン、パーミンガムに関する論文を日本アイルランド協会『エール』第39号に発表した。このようにパーミンガムと現代の作家たちを比較研究することにより、北アイルランドをさらに広範囲に理解することが可能となった。

4. 研究成果

パーミンガムの曾孫でアメリカ在住のオウエン・ハネイ氏は、パーミンガムの小説 *The Red Hand of Ulster*(1912) の出版百周年を記念して放送されたBBCラジオ北アイルランドの特別番組の中で、パーミンガムを“great listener and revealer of the human spirit”と呼んだ。パーミンガムはアイルランド独立戦争、第一次大戦、第二次大戦を経験し人間世界の暗部を知り尽くした。そして信仰心の深いキリスト教聖職者であったがゆえに人間の心に耳を傾け、神学書、小説、演劇を通して人間の本心を露呈し続けた。前述の *Can I be a Christian*(1923)でパーミンガムは、神に対して懐疑心を抱くひとりの架空の青年の問いかけに耳を傾け、「神を信じることによって死後の世界は存在する」と語る。しかしこの作品は、死後の世界は本当に存在するのかというパーミンガム自身の神への問いかけのようにも思われる。パーミンガムのユーモアは「神」「死」と共存している。ヴィヴィアン・マーシャーは *The Irish Comic Tradition*(1962) の中で、「もし神が戯れに人間を殺すのならば代わりに我々は神を笑い飛ばすことによって勝利を得る」と述べ、「アイルランド人はユーモアという偉大な才能を最大限に駆使することにより人間の最も深い衝動のひとつに忠実であるうとしてきた」と指摘する。パーミンガムも時には、*The Hymn Tune Mystery*(1930) や *A Sea Battle*(1948)等の小説の中で神をからかうような描写をしている。

しかしバーミンガムは、根本的には忠実に神に仕える信仰心の深いキリスト教聖職者であったがゆえに、「絶望の中のユーモア」の描写を通して、アイルランド人特有のユーモアという偉大な才能を最大限に駆使し、すべての生き物の宿命である死の恐怖から人間を遠ざける作品を書き続けてきたということを解明した。また前述の *The Red Hand of Ulster* は、イギリスの手ぬるいナショナリスト抑圧に業を煮やした北アイルランドのユニオニストたちがイギリスに謀反を起こし、独立国を樹立しようとする風刺小説である。2016年、北アイルランドの意思に反してイギリスがEUからの離脱を決意し、北アイルランドの将来に不透明感が漂ってきた。この小説は今日の北アイルランドを預言するような作品で、その意味からもバーミンガムの小説は現代的な意義を持っていることを解明した。なおこの作品に関しては令和2年度に『別府大学短期大学部紀要』第40号（令和3年3月）に論文発表予定である。数年先にはバーミンガムに関する研究書の出版を予定しており、それに向けてこの3年間の研究で多くの成果が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 八幡雅彦 | 4. 巻 No.35 |
| 2. 論文標題 "Connaught to Dallas": Journeys of a Novelst, George A. Birmingham, and his Descendants in America | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Cathair Na Mart: Journal of Westport Historical Society | 6. 最初と最後の頁 pp.16-23. |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 八幡雅彦 | 4. 巻 第38号 |
| 2. 論文標題 Families and Northern Ireland Represented in Deirdre Madden's Novels: The Role of Images, Metaphors and Symbols | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 別府大学短期大学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 25-34頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|------------------------|
| 1. 著者名 Masahiko Yahata | 4. 巻 第37号 |
| 2. 論文標題 Humor in Despair: George A. Birmingham's Fiction and Nonfiction on the First World War | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 日本アイルランド協会学術誌『エール』 | 6. 最初と最後の頁 pp.3-22. |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 八幡雅彦 |
| 2. 発表標題 Families and Northern Ireland Represented in Deirdre Madden's Fiction |
| 3. 学会等名 IASIL Japan（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Masahiko Yahata |
| 2. 発表標題 Quests for a Northern Irish Identity: Glenn Patterson's Latest Works of Nonfiction and Fiction |
| 3. 学会等名 国際アイルランド文学協会 (IASIL JAPAN) 国際大会 (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ホームページ「小説家ジョージ・A・バーミンガム」(<http://geo-birmin.com>)を開設し、バーミンガムの略歴、作品及び概略、バーミンガムに関する文献及び文献所在地を紹介している。

| 6. 研究組織 | | |
|---------------------------|-----------------------|----|
| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
| | | |